
ハッピーバースデーをありがとう

こつぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハッピーバースデーをありがとう

【Zコード】

Z7366C

【作者名】

こつぶ

【あらすじ】

9月×日。その日は青子の17歳の誕生日。けれど快斗は17歳の誕生日を迎えたその日、彼女のバースデーに現れることはなかつた。日付が変わる寸前に青子にかかつた電話。そうして彼が彼女に贈つたプレゼント。青子の家の周りの夜景全てが彼のプレゼントだつた。素敵なプレゼント。だけど本当は、青子は、快斗の傍にずっといたかつただけなんだよ？原作3巻「ブルーバースデー」より、その後日談。3巻を読んだ121ページを読んだあとにこの小説を読んでいただくと・・・（笑）。・・・粗が見えてきます（だめじ

やん）（注）これは、青子ちゃんバースデー企画「ブルーバースデー」にて贈らせていただいたものに誤字脱字など修正を加えたものです。

「青子、『じめん…』
『いいよ、別に』

17歳になつてはじめての夜。快斗と青子のはじめての会話。
受話器^{レシーバー}しだけれど、快斗の温かさが青子にめしかつと伝わつ
ていた。

別にそんなに怒つてゐるわけじゃない。

だつて、快斗がくれたのは、青子の家から見渡す限りの夜景だよ?
ちょっと近所迷惑な演出だけど、どうしてそんなすゞいことがで
きたのかは青子にはわからないけど…。

だけど、こんなすゞいバーステープレゼントもひつたことないか
う…。

それなのに。やつぱり寂しいと黙つたりするのは、物足りないって
思つかけやうのは…。

青子はやつぱり、欲張りなのかなあ…。

「ねえ、快斗」
「…うん?」
「もう少し、もう少しだけ、声を聞かせて?…快斗の声が聞き
たいよ」

受話器をぎゅっと握り締め、田の前の夜景を見つめ、正面のビル

に光の文字で描かれた『ハッピーバーステー 青子』の文字を何度も噛み締めて。

どうしてだらり、どうしてこんなに素直に言えやうのだらり。
それはやつぱり田の前の快斗がくれたバーステープレゼントのおかげ？

…それとも、逢いたいっていつ気持ちが強すぎるから…？

「ぱ、バーロ、明日学校行つたらいくでも聞けるじゃねーか、
何言つてんだよ」

照れているのか、焦っているのか、ちょっとだけ早口になる彼の声。

「…ううん、今がいいの。17歳の1田田。青子は快斗といつこう風に2人でお話したかったんだよ？快斗と、いっぽいいっぽい、過ごしたかったんだよ…？」

青子がそんな風に呟いた、・・・その瞬間・・・。

1階のキッチンの壁にかけられている柱時計が、12時の音を告げた。

タイム、リミット。

時刻は一時半を回っていた。

黒羽快斗はとある女性の屋敷に来ている。…それは、中森青子の家ではなく、とある『館』。

「あら…」こんな夜遅くの『来訪』とは、一体何の御用かしら…珍しいですわね、貴方ともあらつ方が。寝込みでも襲いつもりでしたのかしら？それならば堂々としてらしてくださいな。言つてくれましたらこのな時間じゃなくても、私はいつでも喜んでおつきあい

「違ひ」

田の前で真つ向から立たれながらも、優雅に藤の振りかごのような椅子に腰掛け、黒髪の美女、紅子は艶やかに微笑んだ。彼女の身に纏つた服は、ネグリジェでもパジャマでも私服でもなく、カラスのような、黒い装束。そのいでたちに快斗は思わず苦笑する。まるで映画や御伽噺に出てくる悪い魔法使いのようだ。…まあ本当に魔女なわけだけれども。

家でもこんな服着てんのか、と。…これじゃ俺が家でもキッドの装束を着ているのと同じだ。そつぬつとして、やめておいた。へタなことを言つて彼女の機嫌を損ねるのは手ではないと思ったからだ。

「わかつてますわ。…中森さんのことじょい？」

くすり、彼女は何でもお見通しだ、とこりよりに小さく笑んだ。
ほら、こいつは何でもお見通しだ。思わずハツと鼻で笑う。それは彼女が使うなんぢやらという魔法の類か。それとも、ただの女の勘といつやつか。椅子の脇の、不気味な石の台の上に置かれた水晶玉をつつと弄つつつも。

「パーティではす」く寂しそうでしたわね…ホント、罪な男ですわ
ね、貴方は」

くすくすと笑いながら、紅子は妖艶に快斗を見上げた。思わずげんなりして、快斗は口を開く。

「そこまでわかつてんなら、おめーの魔術チカラでなんとかできねーか?
?時間に戻すチカラ。たつた一度でいいんだ。…前日に。青子と1

7歳の誕生日を、もう一度初めつから過ルしてえんだ」

「…残念ですけど無理ですわね。どんなに位の上の魔女だとしても、魔女は神ではない。時間の流れに逆らうことはできませんわ」

「…そつか」

がつくり頃垂れる快斗を目に見て、紅子は悪戯っぽい笑みを浮かべる。

ぴつ、と細く長くて白い人差し指を、快斗の目の前に差し出して。

「…ただ一つ。一つだけ方法がありますわ。魔法使いの基本中の基本…。というより、もう用意は整つていたりするんですけどもね」

「…え、それって…」

急に彼女が立ち上がり、奥の部屋までゆっくりと、ひたひたと音をたてて行き、それから中へ消えた。覗いてはいなければ、そこには何か不気味なものが、あるいは不思議なものがあるような気がして、前へ進むのに一瞬だけ躊躇する。ほんの少しだけ遅れて、立ち上がった。

「ちょっと、どこ行く？」

そして少しだけ開かれた鉄扉を僅かに開いたとき……
白い煙のよくな露が部屋の中いっぱいに立ち込めていて、思わず足を止めた。

ただの煙ではない。ツン、とした何か刺激臭。思わずポケットに入れておいたハンカチで口を押さえる。

「紅子……だ、大丈夫か！？」

「一体何をやらかしたんだ？」

正直そんな思いを抱えながら鉄扉を思いつきり全開にしたとき、ちょうど大きな黒い台が目の前に現れて。

そして。

そこで田にするのは、誰かの……白くて細い足。そして、見覚えあるピンクの布地の、快斗の嫌いな魚のパジャマ。それが白い煙に邪魔されながらも少しだけ現れて。輪郭もぼんやりと形を成していく。

く。

あまりの田の前の衝撃に、驚いて息を勢いよく吸い込んだ。ひょ

…まさか。
…そんな。

つといづ音。

そして。

手にしていたハンカチが力を抜いた瞬間、手から滑り落ちぽとりと床に落ちて、彼が呟いた。

「ああ……」

なんであいつがここにいるんだ?

信じられない思いを抱えつつも、それでもとりあえずこの部屋から青子だけでも出させたくて、彼女が眠る台に近づこうとした。なのに、なのにあるみるみるうちに意識がどんどん遠くなつて。

前へ進めない。先へ、進めない。
力がない。

もう、歩けない。

意識が・・・

そんなとき、カタリと音がして。快斗は田だけ音の鳴る方に向けようとした。

思つたとおり。自分の顔を嬉しそうに覗き込む紅子の美しい顔がそこにあつて。

「……紅子、おまー一体何、を…」

クスリ、いつのまにか黒のマスクのよつなものをつけた紅子が奥から現れると、田元を少し細めて笑つた。

「…大丈夫、安心なさいな。あとで私も向かいりますから♪」

「…う」

「…おやすみなさい…良い夢を♪」

その一言で。

まるでぴんと張っていた糸を鋏で切ったように、快斗の意識はふつりと途絶えた。

朝。

中森青子はそのとおり不意に田を覚ました。何かに起されたわけでもなく、ただ自然と。

壁にかけてあるキャラクターものの時計はまだ6時48分を指し

ていて。まだ自分が起きる時間よりほんの少し早い。

ボンヤリ天井を見上げる。

そういうえば今日はとてもいい夢を見た気がする。

誰かに会つて…。

確かに自分がすく大好きなヒトだったような気がするが、それが誰かは思い出せない。

快斗だったか、紅子だったか、父親だったか、母親だったか。それとも全然違うヒトだったか。男だったか、女だったかさえも。

ただ、思いもかけない言葉をかけられたか何かしたような気がする。

「…変な夢だったな」

けれども心地よい夢。一体どんな夢だったのか、それを思い出せないのが何とも悔しい。

さて、これから学校へ行く準備をしようか。

大きく両手を天井に突き出し、伸びをする。それからサイドボードの上に置いてあつた携帯を手にした瞬間、それは鳴った。

6時50分。起きる時間を知らせるアラーム。そして、その音楽は、いつもの流行の音楽じゃなくて。

『HAPPY BIRTHDAY』。

「…れ？間違えちゃったかな」

この曲は自分の誕生日の日だけに設定していたはずなのに。そして、昨日その日を迎えて。気持ちいい朝を迎えたはずなのに。

誕生パーティーも祝つてもらって、沢山プレゼントを貰つて、机

に一杯並べて。夜は快斗がいなくてちょっと悲しかったけど。

…つて。

「あれ？」

昨日置いておいたはずのプレゼントの箱の山がない。活けておいた花もない。

まさか、お父さんがどこかに移しちゃったの？娘が寝ているときにつり忍び込んで？

いろんな疑惑が頭を抱える。でも、ケータイの蓋を開けば、田口ちは。

「ウソ…」

田口ちは青子の誕生日、9月X日だった。

「ウソ、ウソ、ウソ…じつじて！？何で昨日に戻っちゃってるの！？だつて…青子、昨日確かに…。もうわけわかんないよー！」

快斗、助けて…！！！

思わず、携帯電話の履歴ボタンを押す。もしかして寝ているのかもしれない。起きていたって、話を信じてくれないかも知れない。それでも、1パーセントの望みを信じて。

…彼の声を待つた。

一回、二回、… 3回目の通信者。そして、聞こげるの。

「ねえよ、ひな子」

びっくりと落ちていた声で彼が電話に挂る。

「…かー、と…ねえ、じひー、あたし…」
「…戻つちまつたなあ、『田畠』」
「…え?」

「へへへと含み笑いをする快斗、思わずきよとさとじ。

「『昨日』?」
「なんだ、おまえ自分の誕生日も忘れたのかよ。寝ぼけてんじやねーのか?」
「…あ、うそ」

何でだらう。

騙されているのかもしない。携帯電話の時計機能が壊れているだけなのかもしれない。

それでも、彼が今、電話を取ってくれて。ひやんと自分が期待したようなことを言つてくれたから、思わずほつとして涙が出そうになつた。けど、やっぱりちょっとナマイキな態度が気に入らなくて。むつとして顔を荒げる。

「バツ、寝ぼけてなんかいないわよ…快斗、何全てを知つてゐること」と言つてゐるのよーちゃんと青子にわかるように説明しながら…」
「…ああ、俺もあんまつべからんこんだがビロ。…びつやか
れ、『夢』りしこぜ?」

「…夢？…」

「そうそう、夢…。もう一度17歳の誕生日をやり直すために、つてね。とある魔法使いにお願いしといたんだ。そしたら」

「何よそれ、胡散臭いんだけど…」

「ま、夢だからいいじゃねーか」

「…そうなのかなあ」

2度目の17歳の誕生日。パジャマ姿のまま半信半疑で部屋を出て。既に仕事に出てしまった後の一人残されたリビングで椅子に座り、大きく伸びをする。テレビをつければ、確かどのチャンネルも昨日の朝やっていたようなニュースで。

「…なあ、青子」

繋がつたままの電話の向こうで彼が言った。

「うん？」

「学校サボつて、どうか行かね？」

「ええつ！？」

突然拍子もない彼の思いつきに、思わず声のトーンを上げた。

「ダメよー何言つてんの、先生に怒られちやうよー…青子は不良少女にはなりたくありませんー」

「ばーる、所詮夢だよ、夢」

「でも…」

「大丈夫、朝になつたらそんなのウソになるから」

「それでも罪悪感つていうものは残るんじゃないの？やだよ、これが夢だとしても、後味悪い事はしたくないし…」

「俺さ…」

急に沈んだよつな、眞面目なよつな快斗らしくない声をするから。

「……うん？」

「…………もう、後悔したかねーんだ」

彼の声が一瞬そこだけ響いたよつな氣がした。

「昨日の言葉、自分で言つてること、忘れたわけじゃねーよな？」

「……え？」

「……俺とこつぱーこつぱー遇いしたかつたつて話」

「……あ、ああ」

改めて口にされると、どうしてそんなことを言えたのか自分でも恥ずかしくなるけれど。

「願いごと、叶えさせてくれねーか。今だけ、おまえの魔法使いになりたいんだ」

「……つ」

「…………うん？」
心が揺れた。

「……何よ、いつもマジックマジック言つてのクセして……」「……あん？」

「何でもないつ

わざと何でもない口調をしてみる。けれど、どうしても緩んだ頬は直らなくて。

夢でもよがつた。

江戸の風に懲りたか、たんだ。

みんなで過ごした誕生日。それはそれでとってもとっても楽しかった。

でも、やつはリ快進撃がないと、何事も成らぬ。しかし、やつはリ快進撃がないと、何事も成らぬ。しかし、やつはリ快進撃がないと、何事も成らぬ。

「快挙…。今、ビルにいるの？」

あんて、家でもせいかぐたじせり、墨にぐはして

カルマリンランド連れてつてもらうんだから！もちろん、快斗のおため早く着替えての時には江古田駅に待ち合わせねトロビ

「」
え
?

「夢なんだから何とかならないの?」

あのなあ。……夢だろーか何だろーかねーもんはねーんだよー

いじけた声に思わず口元を綻ばす。

「なあ。江古田ショッピングモールでもよくね？江古田動物園とかあ、丘湯で。あ、そうそう、二の前

〔 〕

かなえてくれるんじやなかつたの？魔法使いさん

「あー。ハイハイ」

観念したのか乾いた笑いを浮かべた受話器の向こうの彼に思わず、
ふつと噴出して、暫しの別れの言葉を述べた。電源を切ると、さて、
戦闘開始の顔になり。

今日着ていく服は何にしよう。
恵子に選んでもらつたリップもつけようか。快斗は気づいてくれるかな？

大切な大切な17歳の誕生日。
とっても嬉しい誕生日。

ガタン『トンと電車に揺られながら、青子は隣にいる快斗の横顔と、手に持っている携帯電話の液晶画面を、何度も何度も見比べた。画面には青子の誕生日と、時刻は朝の9時16分を示している。

今でも疑問は消えない。

本当に、今日は9月X日なんだろうか。昨日をもつ一度体験しているのだろうか。

夢なんだから深く考えるなよ、と快斗は言つけれど、それでも…。

いろんな考えがぐるぐる頭の中で回つていて。… そうしてそんな時に、じろじろと多くの人の視線を感じた。きっとこんな平日に私服でデートに行きそうな様子のカツプルを疑わしく思つてゐるに違いない。

これが夢だつたならば、こんなところまでリアルに再現しなくてもいいのに。

… 本当にこれは普通の『夢』なんだろうか。快斗は夢の中で自分が作り上げた『快斗』なんだろうか。それとも、この快斗は現実で… おんなじ夢を共有しているのだろうか。

… 後者であつてほしいと思う。けれど、そんなことがあるのだろうか。あつていいのだろうか。そんな、小説のような話…。

「… なんだよ、青子。人の顔ジロジロ見て。… 気持ちわりいな」

「う、うん…」

「大丈夫だよ、とりあえずオメーが満足するまできつと夢覚めないだろうから。きっとそれがあいつのオメーに対する誕生日プレゼント…」

「あいつ? 何、誰のこと言つてるの?」

「え？ あ、いや、何でもねえ」

慌てて手を顔の前で振つて、快斗は笑つて誤魔化しているよう見えて。

全てを知つてゐるような快斗にちよつとだけずること思いながらも、いつしか次の話題に移り、そんな想いも少しずつ薄れていった。

トロピカルマリンラングは青子にとつても、快斗にとつても初めてだ。テンションがお高くなるのは当然。…なはずなのだけだ。

「……なーんでこいつ魚ばつかりいるんだよ」

入場ゲートから一歩、中に入った瞬間、吐き出すように隣で快斗が呟いた。

中に入れば、魚やたこの着ぐるみが出迎える。出入口を飾るモチーフには魚・さかな・サカナ。彼が吐き気を覚えるのはきっと不可思議なことじやない。青子も出入口に入つたあたりで、トロピカルラングにしておけばよかつたかなあとは思つたけれど、もうそれは後の祭りで。

「え、だつて、当たり前じやない。『マリン』なんだから。海をモチーフにしたテーマパークなんだよ？ そんなの知らなかつたのー？」

だつやー

田を半月にして快斗をからかった。げんなりしている彼にちよつとしたイジワル。くつそーと肩を落として咳く快斗がちよつと可愛い。そう思つてしまつのはいけないのだろうか。

こんなによくしてくれているのに、申し訳ない。…でも笑える。

「…なんだよ、その顔」

「べつにー。でもさ、こんなに魚に囲まれて、魚嫌いを克服できたらいいね!」

「…いや、別に克服できなくていいから…」

ハハハと空笑いをする快斗に、少しだけ可哀想に思えてくる。それでもやつぱり快斗と一緒にここで遊びたくて、じゃあ帰ろつ、といつその言葉をわざと言葉に出さないようにしていた。どうすれば快斗が少しでも楽になれるか。しばし考えていたら、妙案が浮かんできてる。ほむーと両手を田の前で打つた。確かにバックの中に『アレ』が入っていたはずだ、と。

「じゃあ田隠しでもする? 青子、アイマスク持つてきたんだ」

「んなアホな…。俺はどいやつて歩けばいいんだよ…」

「じゃあ青子が快斗の田になつてあげるよ」

「田…? どつするんだよ」

「だあかありあ…………。」うつむくのよー…」

「え、ちよ、おーー」

快斗の手をぎゅつと握る。青子より一回りも大きい、そして骨ばつたその手。男の子の手だ。握つてから一瞬ぼおつとしてしまつたけれど、慌てて言葉を続けた。

「ずっと握つてあげるから。青子が快斗の目になつて、いろんなところに連れていつてあげる。こつすれば自由にいろんなところへ行けるし、何も見なくていいでしょ、う？」

一瞬その言葉に、目を丸くして快斗が青子を見つめていたが、突然さつと目を逸らし、ボソリと言つた。少しだけ機嫌の悪そうな顔。だけど少し顔が赤いのは氣のせいだろうか。

「…アホか。そんなん俺ら目立つだけだつて
「そつかなー。いい案だと思つたのに…」

思わずふうと頬を膨らませた。せつかく快斗のためにと考えたのに、アホ呼ばわりされるなんて納得いかなかつたから。青子が拗ねた顔をしたら、快斗が口元に笑みを作ると、

「…こ、マコソラソダつても、全てが魚じゃないんだらうし。船とか海賊とかそういうのだつてあるんだら？」
「…う、うん」
「だつたら大丈夫だし。…それに、ホントに魚ばっかり囲まれてどうしようもなくなつたら」
「…なくなつたら？」
「オメーの顔見る」とにするよ」

じきんつ

思わず胸が高鳴る。

何、それ。どういう意味？

「え？ どうして…？」

「……ん、だつてさ……。オメーの顔見ると癒されるつ一つか
「え？」

「だから……オメーのアホ面見るとおかしくなつて笑つちまつ。
……おかしくて、気持ち悪さなんて吹つ飛んじまつ」

は？

一瞬何を言つているのか信じられないで青子は耳を疑つた。
それから、我に返つて、気がつけば大声で叫んでいた。

「……はあつー？ 何それー。青子のどこがアホなのよー。言つてみな
れこよ、このバ快斗」

「どいつて鏡見てればわかるだろお。ケツケツケ」

ケラケラと笑う快斗に、本気でむかむか腹が立つて。具合悪いん
じやなかつたのか、と。

「もういい！ 快斗なんて魚に囲まれて泡ふいて倒れちゃつても知ら
ないからー！ もう快斗の心配なんかしないから！ 青子が行きたい乗
り物、全部制覇してやるんだから！ 責任持つて付き合いなさいよ！」

「……え、マジ…？ それは勘弁…」

「うつさこつさこつさこつさこつさこつさこつさこつさこつさ
ねーべえええだつ！」

あかんべえをして見せて、青子は快斗を置いてせかせかと先へ進
む。

今朝のあの優しさ、歯の浮くよみづな氣障な言葉は一体何だつたの
だろうか。

あれこそが夢だったのだろうか、なんて思つてしまつ。

苛苛苛苛苛苛。

「知らない知らない、快斗なんて知らない！ナマイキな」と言つて、所詮魚嫌いの弱虫じやない。青子のこといつも馬鹿にして…青子だつて快斗の「に」と「ぱい」に「ぱい」馬鹿にしちゃうんだから。今日の夕飯も明日の朝食も、お弁当も、夕食も、快斗のお母さん頼んで、全部魚づくしにしてもらつんだから…青子のこと馬鹿にしたこと後悔させてやるんだから…」

せかせかと前へ進み、ずんずんと前へ進み。一人でどんどん先へ進み。追いかける気配がないことに気がつき、不安になつて振り返つた。

誰もいない。いつのまにか人ごみに埋め尽くされ、その中に青子ぽつんと一人だけ。

「…かい…と？」

何でいないの？

さああつと血の気が引き、なんともいえない不安に駆られ、ポケットから携帯電話を取り出すと、快斗あてに電話を発信する。かつて悪いと言われるかもしれない。またバカにされるかもしれない。けれど、はぐれたままなのもイヤだし、せつかくやり直した誕生日もめちゃくちゃになるのもイヤで。

なのに、通信音ばかりで、なかなか相手に繋がらない。

「…………何よ、快斗のバカ。…どうして出出ないのよ…」

3回続けて電話をかけたのに。一度も出でてくれなくて。慌てて元きた道を引き返す。別れた場所に戻つてみても、やっぱ

り快斗はそこにはいなくて。やれやれやああたりを見渡して、深く溜息をついた。

「青子が残酷なこと言つたから、そのまま逃げちやつたのかな……。それとも、怒つちやつたのかな。……青子を置いて帰つちやつたのかな」

そんなの、イヤだ。

「やだよ……。快斗。……青子を一人にしないで」

快斗……

「快斗……」

「はい? なんでしょう」

「つー?」

振り返れば、快斗がにやにやと笑つて立つていて。思わず青子は彼の胸に勢いよく抱きついた。

「つー? な、何すんだよ?」

「バカバカバカ! ! ! どこ行つてたのよー置いてかれたと思つたじやない」

「いや、置いてかれたのは俺なんすけど……」

「つー? それはそうだけど」

わけがわからない、という困ったような顔で快斗が自分を見つめるから、何となく決まり悪さを感じて、それからぱっと快斗から離れた。どこへ行つてたの、そう聞こうとした時に差し出されたのはミント&バニラ味のソフトクリーム。ホワイトとパステルブルーが

交互にくるくると混ざったその色は何とも涼しげで。

「ナニで買つてきたんだ…。それ食つて機嫌なおせよ」

「イヤよ…甘いもの食べたら機嫌直るなんて思われたくないもん」

ペリリと嚙めれば、バニラの甘さとミントのすーと鼻を僅かに通る心地よさを体感して。

「ウソつけ。もう機嫌なおつてら」

「なあつてないもん」

けれども、からかう快斗に抗議するよつと言つた青子の顔は、既に少しだけ笑つていた。

そのあとは本当にあつという間に青子の機嫌は直つて、思つた以上にいろんなアトラクションに乗つた。コースターあり、魔法の絨毯あり、コーヒーカップあり。

どのアトラクションも、最初に快斗が思つたよりはそこまで魚だけを出しているわけでもなく、時たま現れる魚の人形には目を瞑つたり、手に汗を握つて青子に笑わることもあつたけれど。何度か気

分が悪くなることもあつたけれど。それでも何とか順調にいろんなものを乗りこなしていつて。

平日のせいか、あまり込むこともなかつたのも2人の行動を後押ししていたようにも思う。

閉園時間は21時だつたけれども、もう18時の時点で買い物も済ませ、2人は大満足で、帰り道を歩いていた。

「快斗、すごかつたねー、楽しかつたねえ」

「…ああ、そうだな」

疲れが身に纏つていて、夢でも疲れを感じるなあなんて頭のどこかで思いつつ。田の前の青子は疲れを感じさせない。朝にも増して元気が体中に漲つているように見えた。そんなことを言つても、自分も疲れと共に青子の笑顔を見られたという満足も一緒にあつたのだけれども。これで、プレゼントなんてあつたら最高なんだけれど…。きっと夢の中のものは現実にまで持つていくことができないから。

…て。

あれ？

そういえば、とふと思い出す。昨日の…。1回田、俺が快盗キッドとしてオヤジを殺した組織と対決してたあの夜。ホントは渡すはずだったものがあるんじやないか。夢だとしても、昨日は『昨日』なんだから。バックの中を漁れば、じやら…と音がした。

確かに冷たいチョーンと石の感触。思わず、ふと口元を緩ませた。

「青子」

「…え？」

軽く彼女の首筋に触れば、ポンと小さな爆発音と共に首につけられたネックレス。

銀のチョーンに、控えめにきらめく、エメラルドグリーン色をした宝石。金のつめの中にしつかり入った2カラットの代物。それはどう見てもホンモノにしか見えなくて。彼女の首もとできらきらと輝きを放っていた。

「な…にこれ」

「ん？誕生日プレゼント。ホンモノの石じゃねーけどな。世界でひとつしかねーんだぜ？」

そう、世界で一つしかない代物。

なんたってそれは、どこにも売っていない、俺が青子のために作つたやつなんだから。

・・・いつもホンモノを盗むものために、万が一のために模造品を作つている俺にとつてはそんなものを作るのは容易いこと。難しいことではない。けれど、いつもと違うのは人を祝うために作ったモノ。だから・・・。

「ハッピーバースデー。……青子」

「いいの？…だつて、『昨日』だつて祝つてもらつたよ？素敵過ぎるプレゼント青子に快斗はくれたじやない。それに、今日だつて『いいんだよ、あれはあれ。それに、これが本当にオメーに渡したかったものだつたんだから…。だから、大事にしろよな』

「…う、うん」

潤んだ瞳で、青子はじっと快斗を見つめている。

その瞳に急激に体温は上昇し、心音はじりじりもないほど高鳴つて。

やべえ、なんでそんな目で見るんだよ。そんな目で見られると、どうしていいかわからなくなる。

その気持ちが届いたのか、それともたまたまか。青子はさつと俯き、それから涙を拭くと、笑顔を作っていた。まだ、嬉しさの涙の方が勝つて、本当に笑顔が作れていたわけではなさそうだったけれど。

「ありがとつ……快斗。……」めんね、いつも迷惑かけて、我慢ばかり言つて。……なのに、なにこ、どうして快斗はそんなに青子に優しくしてくれるので？

「……それは

「……青子ね、快斗と出合つて本当によかつた。……」青子ね、青子

……快斗のことが

え？

まさかまさかまさか。

「快斗のことが

どくんどくんどくんどくんどくん。

心臓がさうに高鳴つていぐ。青子はようやく落ち着いていたのか、もう涙はなく、こつこつ笑つてこつこつ話つた。

「快斗のことが大好きだよ。…世界中のだあれよりも…」

ちゅ。

ほつぺたに軽く触れるもの。柔らかくて、温かいもの。

一瞬呆けたような顔をして、信じられないような顔をして、目を
眞開いたまま視線だけを横に向ければ。赤くなつた顔で、それでも
笑顔で笑つた青子がいた。

「タイムマッシュ」

ふと、誰かの声がする。その声には、と我に返つた。その声に『起された』と言つてもいいほどの。

その周りには人がいなかつたはずなのに。何かの予感を感じ、振り返れば - - - 。

そこには布を頭から被つたおばあさんが立つていて。にやり、笑つた。

瞬間、それが快斗の知つている人だとわかつた。こいつは。

紅……子。

そう思つた瞬間、白い靄が2人を、 - - - いや、3人を襲つた。

あの、シンとした匂い。

そして、気がつけば老婆の姿も、そして青子の姿もなく。

「青子つ …」

愛しき女性の名前を呼ぶ。けれど、そこには既に自分しかいるようになくなっていた。

『…………え？ 最高のベースボールゼンティなつたかしら』

露の匂いので、老婆の声ではなく紅子の声で、それは声高らかに
言った。

「ああ…サンキュー…な」

快斗は頬に指を押さえながら微笑みなく口元を緩ませる。再び意識はなくなりつつあるのに。それでも、その部分だけの意識ははつりつとしていて。

彼女の唇の感触が起きても残ればいいと思つた。

『…わつわつ早く迎えにいけばよかつたですわ』

ボソリ、露の匂いので、彼女がボソリ、呟いた。キスなんて許せませんわ、と。

そんな彼女の言葉を聞き、ぼやけた頭の中で苦笑を浮かべていた

最中。

快斗の中で、意識は完全に、ふつつと…。

途絶えた。

朝が来る。

6時50分。

携帯電話のアラーム音によつて、青子はぱちりと目を開ました。ベッドの上。辺りを見渡せば、何の変哲もない中森家の、中森青子の部屋。鳴つていたアラームの音は、特別な日ではない。なんら変わらないつまらない平日を示した音楽。日付は青子の誕生日の翌日を示していく。

「… ゆ、め」

青子は、やけにまつさつとした意識の中、くしゃくしゃになつた髪をさつと少しきあげ、あたりを見渡した。前日、青子がベースディーパーティをしたとき友達にもらつたプレゼントの山が机の上にてんこ盛りになつていて。昨日、白馬に送つてももらつたばかりの白い17本のバラは活き活きと花瓶の中で咲き誇つていた。ほおつと小わく息を吐く。

「……夢、だつたんだ」

すこく幸せな夢を見た。夢の中で、快斗がこれは『夢だ』といい、『もうこちど誕生日の日に戻れたんだ』なんて変なことを言い、2人でトロピカルマリンワンドに行き、快斗が具合が悪くなり、ケンカして、仲直りして。… 最後に。

やつと唇を押してみた。

この唇が触れた…。快斗の、頬。

柔らかくみずみずしかった感覚。夢なのにリアルに未だこの唇に感觸^{せきそく}が残っている。

夢とはいえ、何てことをしたんだろ…。
思わず体全体が熱くなつた。

夢の中で、相当恥ずかしいことをした。けれど、これが夢じゃなければ…とふと思つてしまつ。小説や漫画の話の中だと、実は現実でも体感した、なんていう証拠^{しようきょく}がどこかにあつて。

「あ」

青子はさつと首もとを弄る。快斗がくれた、緑色の宝石のネックレス・・・。これが実際に起つたものならば。…なの。」。

「あるわけないか」

首筋には何もなく。ポケットも、辺りを見渡しても。
ふうっと小さく溜息をついた。そんな魔法のような話、実際あるわけないかと。

それでも実際見たこともない素晴らしい夢を、忘れる事はなく、始まりから終わりまで覚えているなんて。これもまた神様からのちょっと遅れた誕生日プレゼントなのかな、なんて思つたりした。
そうして大きく伸びをする。

「ああ、これから学校行く準備始めなきやー。」

みんなに昨日はパーティ来てくれてありがとう^{トトト}と言つんだ。
快斗に、パーティは残念だつたけれど、昨日の夜景のプレゼント、
ありがとうつて言つんだ。これからもよろしくね、つて言つんだ、

と。

青子は急いで自分の部屋に戻るために階段を駆け上った。

いつもの学校、いつもの授業、何も変わらないいつもの日常。青子は横でぐうぐう居眠りをしている快斗を見て、ちよつと笑つてしまつ。

結局快斗は遅刻、ギリギリに学校にやつてきて、快斗だけはお礼も言えずじまいだつた。

「ねえ、快斗。今日は素敵な夢を見たんだよ・・・？」

眠つたままの快斗にそつと語りかける。

「快斗と一緒に、マリンラングに行くんだよ～そつして
「俺も見たぜ、その夢」

「え...？」

ぱちり。

快斗の瞼が開いて、机に突つ伏したままの体制で、彼が自分を見つめていた。

「快斗……」

「それって、もう一度17歳の誕生日を迎えるって、猶豫しないで
かったか？」

「う、うん……」

「誕生日プレゼント、渡したるへん」

「う、うん」

「……ほれ」

「……え？」

机の下でうつと握りされるのは、夢とまったく同じもので。

「えええええええつ……」

思わず甲高い声でしまった。…もちろん、クラスメートの沢山の注目と、そして笑いの渦に巻き込まれることになったのだけれども。

「…あ、ほ

ふつと噴出して、快斗がおかしかったと笑った。

「なつ…なによおー」

混乱を抑えきれないまま、それでもちょっとむっとして快斗を睨んだ。そして田線をすらせざ、彼の手元のペーパーに螢光ペンで大きく書かれる文字。

『ハッピーバースデー 青子！ これからもよろしくなー』

「…もう、17歳の誕生日祝うの、3回目だけな」
おかしそうに笑う快斗に、青子も思わず口元を綻ばせた。
クラスの注目を浴びて恥ずかしい気持ちも、アホと言われて怒った
気持ちも、何もかも吹っ飛んで。

「ありがとう」

小さい声で呟いた。

あれから数ヶ月。今でもあの時のことは鮮明に覚えてる。まるでそれは昨日・・・いや、さつき起きつたばかりかと思つてしまつほど。

あの夢は本当に2人で共有した夢だったのだろうか。今でもやつぱりその考えは消えなくて。だとしたらとても不思議。一体どんな世界に迷い込んだのだろう。

驚きとともに、嬉しいこと、幸せなことで。

けれど、一つ気になることがある。それは。

「... 青子のキス、今でも覚えてる? スキッヒ青葉ちゃん、覚えてる?」

聞くに聞けない、たつた一つの氣になること。

自分は一語一句覚えているから。・・・もし、あれが青子の作り出した快斗じやなくて、最後まで『快斗』本人だとしたら。もつと自分のように覚えていて、聞かないふりをしているのかなあ、なんて思つて。

やつと思つてやつぱり恥ずかしくなつちやうか。・・・でも。

もしやつなら、そのままにして。

聞かなかつたふりをしていて。

いつかは、ちゃんと、覚めたら終わるものではなくて、未来があるものとして・・・。現実として青子から言つから。ちゃんと好きだつて言つから。

だからお願い、待つていて。

ね、快斗。
ハッピーバースデーを、ありがとう。

終

+++ あとがき +++

はじめまして&こじんこちは、じつぶです。「まじっく快斗」というジャンルに投稿させていただきまして、ちょいひと緊張します。

じつらまで読んでくださつてありがとうございます。

今回のお話は、粗筋にも載せていましたが、青子ちゃんの誕生日を祝おうとこう企画様に投稿させていただいたものです。すみません、こっちにも載せちゃいました(苦笑)。連載モノにするつもりはなかつたのだけれど、そして話はもっと別の話だつたのですけれども、どういうわけか、こんな感じに(笑)落ち着きました。ていうかまた夢ネタかよ、異世界、タイムスリップネタかよと思つている人ももしくはいるかもしれません。：じつぶの小説を読んでくれている人がもしいらつしゃつてそんな気持ちになられた方がいたら、ごめんなさい(苦笑)何もいえません。ていうか連載そつちも頑張ります(苦笑)

まじっく快斗だけを書いたのは、昔書いた「聖なる夜は君と・・・」以来かな。その中に快青ネタがあつたのですが、純粋にこれだけつてのもまたはじめてなのです。だからつまくできるかなあと思いつながら書きました。普段、新ちゃんやら蘭ちゃんやら、哀ちゃんやら・・・とコナンネタでやつてるので、快斗くんがどうしても工藤さんに見えてきて仕方ありません。・・・青子ちゃんも、エセに見えたらいこめんなさい(苦笑)

でも愛だけはすごく 笠つてます。本当に。大好きです、この2人。

紅子ちゃんもすごく大好きです。彼女をいっぱい今回使ってよかつたー。

補足ですが、今回の小説、星で段落を分けているわけですが。白星は、青子ちゃん視点、黒星は、快斗くん視点になつてます。見難かつたらごめんなさい。

それでは本当にありがとうございました！－また「まじっく快斗」ジャンルでアイデアが浮かびましたら頑張って投稿したいので、その時はまた見てやってください。どうぞよろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7366c/>

ハッピーバースデーをありがとう

2010年10月9日07時49分発行